

岐阜女子大学学生の家族に関する意識の変遷 — 「家族関係学」の受講者を中心に—

三輪聖子

生活科学科 生活科学専攻

(2018年11月15日受稿)

The transition of consciousness about the family of Gifu Women's University students — Focusing on students in “Family Relations” —

Department of Home and Life Science, Major in Home and Life Science,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

MIWA Satoko

(Received November 15, 2018)

要 旨

急速に変化している日本において家族の現状を個々の実状から正確に把握する必要があると考え、「家族関係学」の講義をおこなうにあたり、受講者である学生は家族に対してどのような意識や考えをもっているのか、また、自分の今後の家族形成をどのように考えているのかを把握し、学生の実態を掴んで授業に臨みたいと考え、「家族に関するアンケート調査」を実施し16年分のデータを整理した。結果は、2000年代と2010年代において変化は見ることができ、社会的影響はあると考える。しかし、自分の家族や生活はおおむねうまくいっており満足していることが明らかとなった。

キーワード：家族、結婚、親の扶養、仕事と家庭

1. 目 的

急速に変化している日本において家族の現状を個々の実状から正確に把握する必要があるとして、1998年に日本家族社会学会・全国家族調査委員会によって、全国家族調査が実施された。21世紀に向けて家族に対する意識や現状が大きく変容していく状況を把握し、今後の家族政策の基礎的指針を探ろうとしたのである。

そのような時期に「家族関係学」の講義を

おこなうにあたって、受講者である学生は家族に対してどのような意識や考えをもっているのか、また、自分の今後の家族形成に対してどのように考えているのかを把握し、学生の実態を掴んで授業に臨みたいと考え、「家族に関するアンケート調査」を実施した。そして毎年の積み重ねによって2001年～2018年の18年間（2年間を除く）、実質16年分のデータを得て整理した。そこから学生の家族や結婚、親の世話、仕事などに関する意識や考えの変遷を明らかにすることを目的とする。

2. 方 法

「家族関係学」を受講した学生を対象に第1回目の授業開講前に2001年から2018年まで実施した。但し、2008・2009年は、授業が開講されず実施していない。対象者は、家政学部家政学専攻・生活科学専攻2年生の学生である。対象人数は表1に示した通りである。選択科目であるため年度によって人数にばらつきがある。また、調査は家族・結婚等に関する16項目を「1. あてはまる」「2. ややあてはまる」「3. あまりあてはまらない」「4. あてはまらない」の4尺度で尋ねた。さらに家族からイメージされるものを5つまであげてもらい、自分にとっての家族の存在は自由記述とした。ここでは16項目の内容を分析する。

表1 調査対象者の人数

年度	対象人数 (人)	年度	対象人数 (人)
2001	43	2011	13
2002	64	2012	21
2003	43	2013	14
2004	38	2014	25
2005	24	2015	15
2006	17	2016	15
2007	14	2017	10
2010	8	2018	17
		合計	381

3. 日本の家族を取り巻く状況

20世紀の終わりに、日本経済はバブルの崩壊を迎え、経済状態は一気に悪化し、家族の生活にも大きな影響を与えた。21世紀の初頭から家族生活に影響を及ぼす法や制度の改正が実施された。男女雇用均等法の改正、労働者派遣法の適用範囲が拡大し、若者や女性を中心に雇用の流動化と不安定化が進んだ。それに伴い晩婚化、格差問題も指摘された。少子高齢化がさらに進展し、介護保険制度が導入され、老親扶養意識にも大きな影響を与えた。また子育て支援を強化する制度も

改正された。今後、さらに高齢者人口の割合が増加し、少子化は大きく改善されないことを考えると、人口減少が加速する。若者の晩婚化、未婚化がさらに進み、単身者世帯が2020年には34.4%を占めると国立社会保障・人口問題研究所は示している。

このような家族を取り巻く環境の変化は家族・個人の意識にどのような影響を与えるのだろうか。

4. 調査結果

(1) 属 性

①きょうだい数

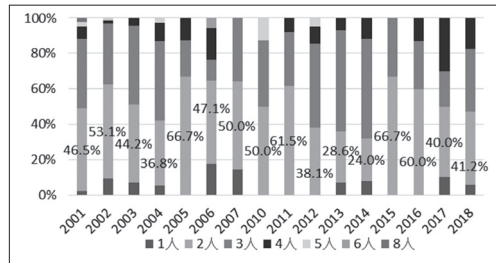


図1 きょうだい数

図1に示す通り、一人っ子は、非常に少ない。最も多い年でも17.6%であり、2010年以降は、一人っ子が全くいない年が5年もあった。年によってばらつきはあるものの2人きょうだいが半数を占めていることがわかった。次に3人が3割程度いた。4人も少なくない。年によっては5人以上もいた。本学の学生は、比較的きょうだい数が多いと思われる。

②出生順位

図2は、出生順位を表している。年によってばらつきはあるが、合計すると第1子が最も多く47.5%、第2子36.0%、第3子4.2%となった。つまり長女である場合が多かった。

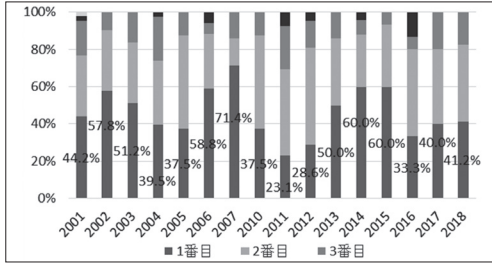


図2 出生順位

③兄弟の有無

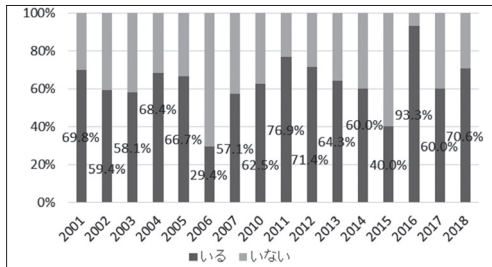


図3 兄弟の有無

「男がイエを継ぐ」という意識が残存している可能性を考え、男のきょうだいがいるか尋ねたところ、図3の通りであった。2006年が「いる」割合が29.4%と極端に少ないが、他の年は「いる」がほぼ5割を越えていた。全体的に兄か弟がいる学生が半数以上であった。

④祖父母との同居経験

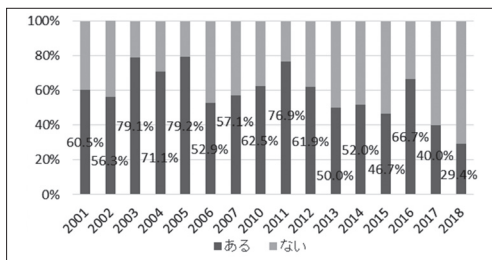


図4 祖父母との同居の有無

図4は、祖父母との同居経験である。2001～2005年は7割近くが同居していたと答えているが、徐々に減少傾向にある。2018年は最低の29.4%となっている。2000年代に入っ

てからも三世同居が多く、全国平均から見ても非常に高いことがわかった。本学学生は地方出身者が多いためこのような結果になったと考えられる。

(2) 家族に関する意識

①日本の家族について

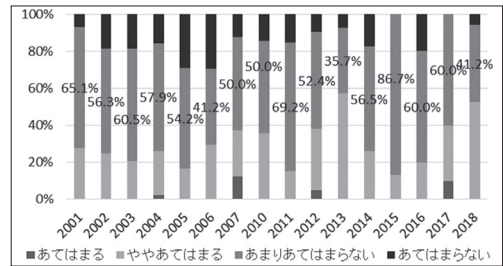


図5 日本の家族はうまくいっている

図5は、「日本の家族はうまくいっている」について尋ねた結果である。「あてはまる」つまり日本全体としてうまくいっていると思う学生は、ほとんどいなかった。最も多かったのは「あまりあてはまらない」であり、どの年も6割前後を示し「あてはまらない」を含め7割以上がうまくいっていないと答えていた。これは年に関わらずほぼ同様の回答であった。ただ、2018年は、うまくいっていると感じる人とうまくいっていないと感じる人がほぼ半数であった。日本の家族はあまりうまくいっているとは思っていないことがわかった。

②自分の家族について

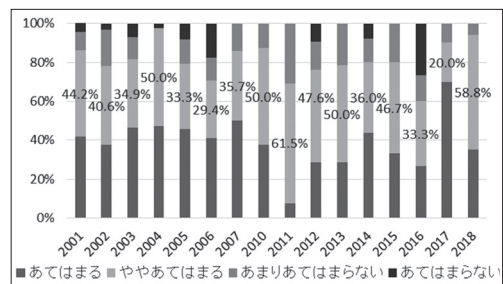


図6 自分の家族はうまくいっている

図6は、「自分の家族はうまくいっている」かについて尋ねた結果である。自分の家族はうまくいっていると感じている学生が多い。「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた人は、7割前後存在していた。ただ、2000年代に比べ2010年から徐々に「あまりあてはまらない」「あてはまらない」割合が増加していた。しかし、2017・2018年はうまくいっていると回答している人が9割に達していた。日本の家族はうまくいっていないが、自分の家族は大丈夫だと思っていることがわかった。

③結婚について

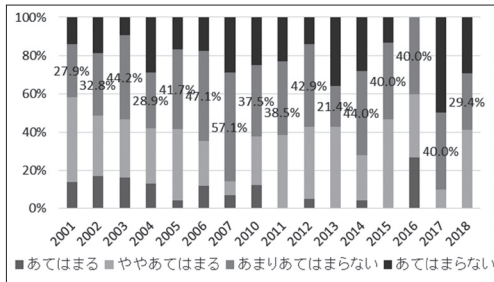


図7 特にならぬ結婚することはない

図7は、結婚について尋ねた結果である。一般的に「特にならぬ結婚することはない」について、「あてはまる」と回答した人は2001～2010年（2007年を除く）で10%を超えていたが、2011年から数%となり減少した。但し2016年は26.7%と非常に高かった。全体的にみれば、結婚はすることはないと考える人と結婚はした方がよいと考える人が約半数であった。しかし2007年と2017年は、結婚した方がよいと考える人が9割近く存在した。

④自分の結婚について

図8は、自分の結婚について尋ねた結果である。「自分はいずれ結婚する」について、8割以上が「あてはまる」「ややあてはまる」

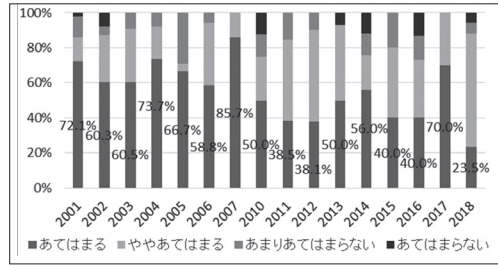


図8 自分はいずれ結婚する

と回答していた。2016年は、自分の結婚に否定的な人が26.6%おり、一般的にも自分にとって結婚に否定的な人がいたと考えられる。しかし、一般的に結婚は特にしなくてもよいが、自分は結婚すると思っている人は多い。

⑤結婚後自分の親との同居

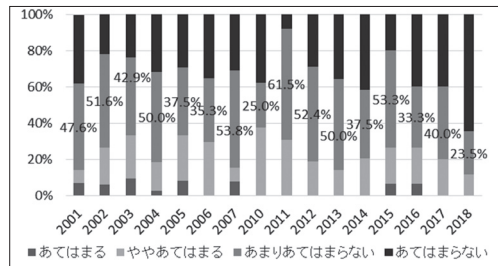


図9 結婚したら自分の親と同居する

図9は、「結婚したら自分の親と同居する」かについて尋ねた結果である。2000年代は「あてはまる」と答えた人が数%存在していたが、2010年代に入るとほぼいなくなり、「あてはまらない」と回答する人が増加傾向にある。女性にとってサザエさん家族は、理想的と言われた時もあったが学生は自分の親との同居を望んではいない。

⑥結婚後夫の親との同居

図10は、夫の親と同居するかを尋ねた結果である。「あてはまらない」「あまりあてはまらない」と回答した人は、2000年代は、6～7割であったが、2010年代になると8～9割

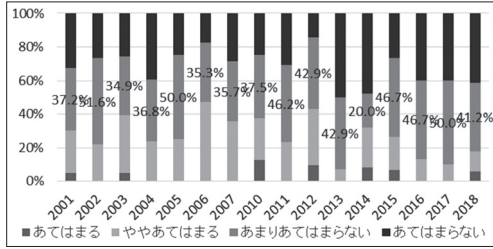


図10 結婚したら夫の親と同居する

と増加していた。結婚後は、どちらの親とも同居せず、夫婦で生活したいと考えている学生の多いことがわかった。

⑦結婚後の親との同居

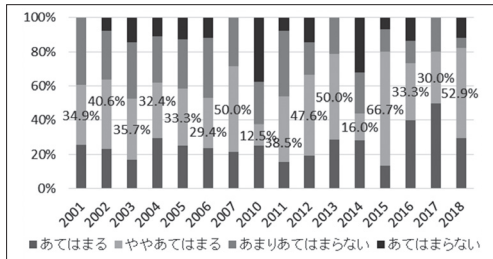


図11 結婚しても親とは同居しない

図11は、「結婚後親と同居しない」かを尋ねた結果である。「同居しない」と回答する人が増加傾向にあるのは⑤⑥と同様の結果であるが、⑤⑥に比べ同居を否定している人の割合はやや低かった。親との同居はしないと思っているが、親の介護などを考えると将来的には分からないと感じている学生もいると考えられる。

⑧結婚後の仕事の継続

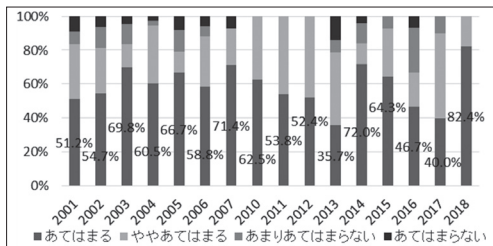


図12 仕事は結婚しても継続したい

図12は、結婚後の仕事の継続について尋ねた結果である。「継続したい」と回答した人は2000年代で6割前後存在していた。就職できない人が増加しており、就いた仕事は続けたいと考えていたと推察される。2010年代になると年度によって3~7割と揺らぎが大きかった。2000年代当初と比べ経済面において夫婦共稼ぎをしないと安定した生活が得られないと思っていると推察される。

⑨出産・育児をしながらの仕事の継続

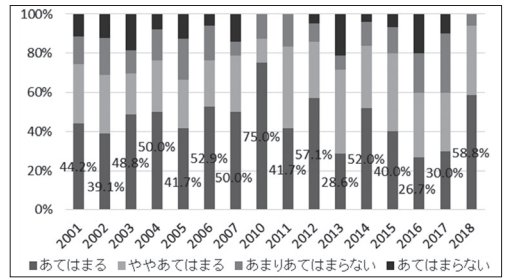


図13 仕事は出産・育児をしながら継続したい

図13は、出産・育児をしながらの仕事の継続について尋ねた結果である。2000年代は、仕事の継続を望む人が徐々に増加していた。しかし2010年代になると減少傾向になった。2018年度は「あてはまる」が82.4%と非常に高くなっていった。労働力不足や男女共同参画社会の実現を目指して社会が変化してきており、子育て支援も充実しつつあり、女性も仕事の継続が可能になってきていることは間違いない。お金のために働かないといけなと感じている学生は多い。

⑩男が家事をすること

図14は、男性の家事について尋ねた結果である。2001~2003年は「あてはまる」が8割を超えていたが、2010年に向けて減少傾向にあり2011年は61.5%へ減少した。しかし再び増加し、2018年は82.4%となった。全体的には賛成と答えた人は9割を超えてい

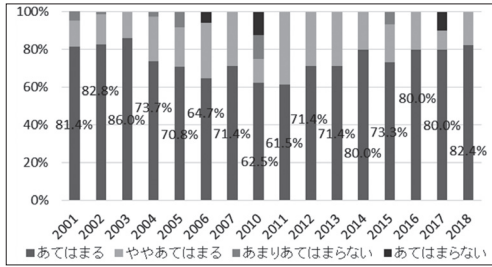


図14 男が家事をするのは賛成

た。現在、男性の家事参加は、当然のこととして捉える必要があると考える。

⑪男が子育てをすること

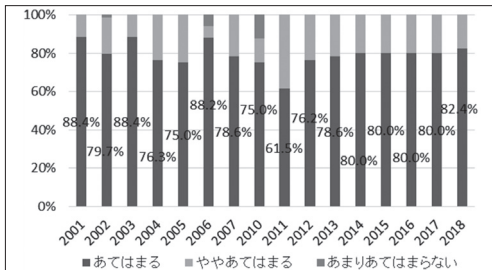


図15 男が子育てをすることは賛成

図15は、男性の子育てについて尋ねた結果である。「あてはまらない」と回答した人は一人もおらず、2002年・2006年・2010年以外は、100%賛成であった。厚生労働省が「育児をしない男を、父とは呼ばない。」といったのは1999年であった。この年は新エンゼルプランを策定し少子化問題に取組み始めたところであった。現在は、イクメンという言葉も定着し、父親の子育ては当然のこととされている。

⑫離婚について

図16は、「夫婦関係がうまくいかなければ離婚したらよい」かを尋ねた結果である。「あてはまる」は2006年が29.4%と最も高く、2016年は20%であった。2001～2003年は1割程度あったが、他の年はほとんどなかった。離婚は、賛成と反対の意見が分かれるところ

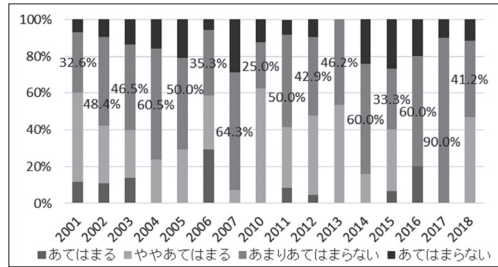


図16 夫婦関係がうまくいかなければ離婚したらよい

である。子どもの立場から考えれば、親の離婚は避けたいところかもしれない。しかし、親の離婚を経験している学生もおり、そうでない学生と意見が分かれるのかもしれない。家庭内の雰囲気が悪いま夫婦関係を継続するよりは、解消し新たな人生を歩むことも選択肢の1つと考える。但し、子どもへの支援は最重要課題である。

⑬親の世話

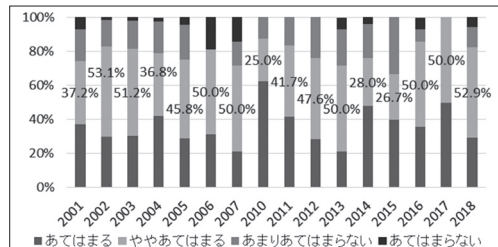


図17 親の世話は子どもがみる

図17は、一般的に「親の世話は子どもがみる」かを尋ねた結果である。全体的に8割ほどが親の世話は子どもがみると考えていた。しかし、2012～2015年は70～60%代であった。

⑭自分の親の世話

図18は、「自分の親の世話は自分がみる」かについて尋ねた結果である。2006年・2013年・2018年は、「あまりあてはまらない」と回答した人が2割を超えていた。⑬の親の

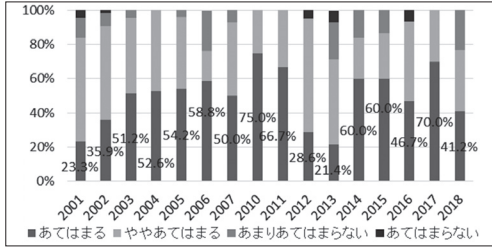


図18 自分の親の世話は自分が見る

世話と比較すると、自分でみると考えている人は多かった。しかし、自分だけでみるのか、他のきょうだいも加わるのかは分からない。

⑮夫の親の世話

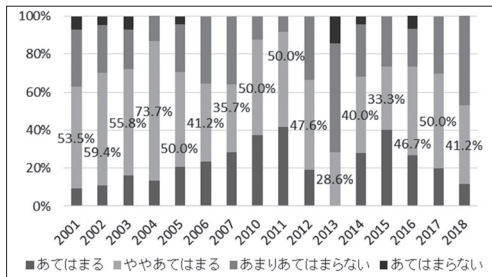


図19 夫の親の世話は自分が見る

図19は、「夫の親の世話は自分が見る」かを尋ねた結果である。夫の親の世話も自分が見ると考えていた人は、2011年まで60%～90%と高い割合で存在していた。2012年から8割を超えることはなく、2018年は53%であった。自分の親に比べ低くなっていた。自分の親は自分が見るという意識であると考ええる。

⑯自分の家庭・家族に対する満足

図20は、「自分の家庭・家族には満足している」かを尋ねた結果である。2000年代は、「あてはまる」と回答した人は比較的高く6割を超えていた。しかし、2010年になると37.5%となり2013年まで30～40%代であった。その後6割を超え、2017年は8割であった。全体的に満足度は高いと思われるが、

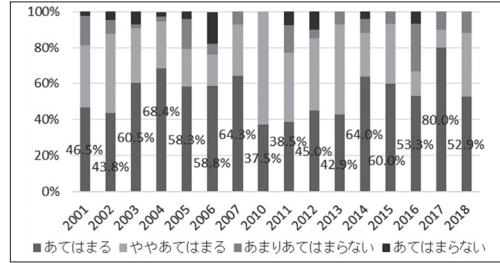


図20 自分の家族・家庭には満足している

2006年17.6%，2012年10%が「あてはまらない」と回答した。中には家族に不満をもつ人もいるのである。2010年を除いて全ての年で、あまり満足していないと回答した人が存在していた。その人たちが、何に不満を持っているのかわからないが、学生の話から「家族がうるさい」など家族の煩わしさや親子関係の複雑さ（ステップファミリー）、DV・虐待などの状況が垣間見える。

5. 結 論

学生の家族や自分の結婚等に関する調査結果から、次のような結果をまとめることができる。

- ・本学の学生はきょうだい数が比較的多く長女の場合が多い。また、家族形態は三世代同居をしている割合が高かったが、近年減少傾向にある。
- ・家族に関して日本の家族はうまくいっていないと感じるが、自分の家族はうまくいっていると思っていることがわかった。
- ・結婚は、一般的にした方がよい人としなくてもよいと考える人が半数であったが、8割以上が自分は結婚すると考えている。
- ・結婚後の親との同居は、自分の親や夫の親とともに同居はしないと考えている割合が高く年次とともに上昇している。
- ・結婚後の仕事・子育ては、結婚しても子育て期も仕事は継続したいと考えている。就

業について社会状況とも連動しており、経済的問題が影響している。

- ・離婚については、賛成・反対の意見が分かれている。
- ・親の世話は、自分がすると考えている学生は多い。夫の親は、自分の親に比べ低い。
- ・自分の家庭や家族に満足している学生は高い。しかし、家族に問題を抱えている学生も1~2割存在している。

参考文献

- 1) 日本家族社会学会編「全国家族調査」『家族社会学研究』第13巻題1号2001
- 2) 岩井紀子「日本の家族の変化とこれから」日本家族社会学会編『家族社会学研究』第23巻題1号2011
- 3) 牟田和恵編『家族を超える社会学 新たな性の基盤を求めて』2014 新曜社